

遠隔環境下における史料調査・整理法の研究

野村 朋弘・石神 裕之・川合 健太

はじめに

二〇二〇年一月に新型コロナウイルスの感染者が国内で確認されて以来、二〇二二年に至るまで国内はもとより世界での感染拡大は続いている。このパンデミックは日常生活のみならず教育界においても大きな影響を及ぼした。大学院や大学など高等教育機関で主要な課題となったのは、「遠隔授業」である。それまでの「ノーマル」である対面授業が困難となり、「ウイズコロナ」や「アフターコロナ」を見据えて様々な取り組みが成された。但し、機関において使用するソフトウェアなどは様々で統一がなされず、かつまた遠隔という未知の取り組みが教員個々人の資質に頼ることとなったのである。取り組みを個人のものとして、大学を問わず横断的に状況共有をはかることが喫緊の課題となった。教育系の諸学会ではシンポジウムや特集が組まれ、様々な成果や知見を得ることができた。更に注目すべきは教員有志が横断的に行った取り組み、大嶋えり子・小泉勇人・茂木謙之介編『遠隔でつくる人文社会学知——2020年度前期の授業実践報告——』である⁽¹⁾。手探りの中、各大学、更にいえば各教員の創意工夫によってなされた授業実践が、オンライン上でも公開された。但し、こうした取り組みの主たるものは人文学の領域の講義に相当するもので、特に芸術・デザイン領域での取り組みの成果はあまり表だって情報共有されていないのが現状である。

さて、パンデミックの状況を経て、元来の対面でなければ教育効果を発揮できない授業内容や、遠隔で取り組むことによって教育効果を発揮できる授業内容といった精査が進められてきた。こうした「教育2・0」とでもいうべき状況下の中で、いまだ解決を見ないものもある。その一つが史料調査及び整理である。史料原本を所有する機関・個人のもとに訪れ、調査及び整理を行うもので歴史学の一領域である文献史学では研究はもとより教育的にも最重要視されている。原本を扱うという、対面でなければなしえない活動でもあるが、意義としては二点に集約される。第一には史料の扱い方を教員から学生へ伝えるこ

と。第二には撮影の仕方や調書の取り方を学生へ指導しつつ、複数名で実施することによって作業効率をあげること、である。

これらの調査及び整理をどのように「ウイズコロナ」時代に実施すべきか。その検討を行うため、二〇二一年度京都芸術大学の特別制作研究費助成（二巻で「遠隔環境下における史料調査・整理法の研究」を野村朋弘・石神裕之・川合健太で実施した。野村は文献史学、石神は考古学、川合はデザイン領域の研究・授業を行っている。異分野の教員による学際的な共同研究である。芸術大学の利点を活かし、デザイン領域での教育手法を人文学の調査・整理に取り入れることを目的とした。遠隔のシステムを用いつつ、共同作業としての歴史史料の調査や整理を実施する手法の確立をめざし実践を行った⁽²⁾。本稿は今後の調査や授業に役立てるための記録である。

一、これまでの史料調査・整理の在り方について

まずは歴史学において従来の史料調査について説明したい。歴史学の史料調査そのものについて、まとまった研究や報告などはなく、経験知として各大学・ゼミによって継承されているのが現状といってもよいだろう⁽³⁾。一つの史料群をどのように調査するか。対象の機関（寺院・神社・家・公共施設など）によって伝来してきたものか、若しくは購入されたものかなどでも方法は異なる。但し最も重要なのは一点目録を採ることである。史料がどのように伝来されたものなのか、史料群の全貌の把握のためにも「目録化」は重要になる。目録化には①調査・整理を行い、保管・保存していくため、②公開し、研究するため、の意味がある。

所蔵されている場所（多くは蔵である場合が多い）や現状の保管・保存の把握を行った上で、史料の一点目録を採る。併せて史料整理を行うため、中性紙封筒などに入れていく。中性紙封筒には目録を採るための項目を印刷することが多い（図1）。

史料の総数が分からないため、まずは仮番号を付けていき、史料群の総数と内容把握に努める。どのような項目を目録として採るかは、所蔵場所から出ていくときの目録で、調査者内で相談することが多いが、主としては史料名、形態、年月日などは必須であろう。

古典籍については、日本古典籍総合目録データベースなどで確認作業も行う

家文書

整理番号	仮番号		
表題			
(西暦) 年 月 日 (年)	形態	縦・横・小横・状・和・洋 合冊・綴・枚・()	数量
差出人		受取人	
発行所			
備考			

記入者： _____

図1 中性紙封筒の表書

ことが必須である^④。古文書については古代・中世であれば文書名を、近世・近代であれば柱書などを採る。
併せて、史料撮影を行っていく^⑤。
史料調査は所蔵機関のもとを訪れて実施するので、撮影の場合、機材として三脚・照明・薄葉紙・メジャー・ケサンなどを用意する^⑥。



図2 前津小林文庫での史料撮影風景

こうした調査・整理の教育的な側面はどのようなものか。第一に史料原本の扱い方を教員から学生に伝えることである。例えば卷子であれば、どのように開くか、巻くのか。古文書といっても虫喰いなど破損しているものも多い。どのように扱って現状を維持していくかを伝えていく。第二には目録を実践的に採っていくことで、どのような点に注目すべきかを経験則で学んでいく。第三にはくずし字などに慣れていくことである。

こうした取り組みの中で、遠隔化でどのような取り組みが出来るかを、デザイン領域の川合と検討した。川合が所属する空間演出デザインコース（以下、空デと略す）では演習科目で遠隔的な手法を取り入れている。

本学の通信教育課程では遠隔システムとしてZoomを導入している。また、空デをはじめとするデザイン領域では、演習系授業で制作物の作り方を説明し、また学生に制作してもらう。そのため教員の手元を精細に示し理解を促す。制作工程や細部を画面越しに指導する必要があるためだ。

こうしたテクニカルな手法を取り入れて実践を行った。

二、遠隔システムを用いた史料調査・整理の実施

史料調査・整理を遠隔で行うに際して、遠隔で出来ること、出来ないことの切り分けをまず行った。原本史料の扱いだが、複数名で密室となる調査会場に集まることは不可能なので、直接、指導することは不可能である。また史料原本をそれぞれ調査者の手元に送ることも不可能である。そのため高精細で教員の扱い方を見ることが重要になる。

次に目録を採るために史料そのものの高精細画像を撮ることと、遠隔参加者に見せることとした。以上の基本的なポイントを打ち合わせ、検証実験を行った。実施したのは二〇二二年三月四日で、川合・野村は東京外苑キャンパスの教室で史料を扱い、石神は京都の瓜生山キャンパスから遠隔で参加した。

史料調査・整理に用いたのは、『GENESS』23号でも紹介した京都の伊東家文書である^⑥。所蔵者の伊東昌広氏の御厚意によって、23号で紹介した史料の他にも調査・整理する機会に恵まれた。これらの史料は京都における近代茶業を明らかにできる重要な史料と考えられる。粟倉や寺本らの近代茶業史の研究においても^⑦、伊東熊夫の業績はあまり触れられておらず史料の整理と目録化を踏まえて研究が待たれている。

まず撮影スペースとして教卓に近い場所に長机二本を並べて用意した。

ZoomのホストになるPC（今回はMacBook Proを使用した）は、教室内を俯瞰して撮影出来るようにし、史料を上部から撮るためiPad Proを設置した（図3）。

次に照明については実際にLEDのライトを二本設置したものの、Zoomの画面越しではフリッカーノイズがあり、写真用レフランプ（ランプ電力500W、色温度5900K）を用いた。（図4）

次に上部から垂直に撮影するためiPad Proを用いた。水平器を用いて水平を保つ。最初はオンラインでZoomにログインしたものの遠隔参加している石神から文字が判読できない旨指摘がなされた。また、フルハイビジョンの書画カメラに交換したものの結果は同様で、料紙の状況や文字の判別のためには、ホストPCとiPad Proを有線で接続し、文字の判読など過不足ない点を確認出来た（図5）。

一点ずつの史料については、教室にいる教員がiPad ProのApple Pencilなどを用いて補足説明を行う^⑧（図6）。それに基づき遠隔で参加している者が役割分担をして、目録化についてはチャットでまとめ、Googleのスプレッドシートな

どで目録を共有するのが最善だろう。
教室での史料整理の日以降は、それぞれ自宅で目録作成を行い、後日オンラインで目録の校訂作業を行う。そうすれば、可能な限り直接に集まる人数を減らしつつ、史料調査・整理をすることが可能になる。



図3 水平器を用いてiPadを設置した状態

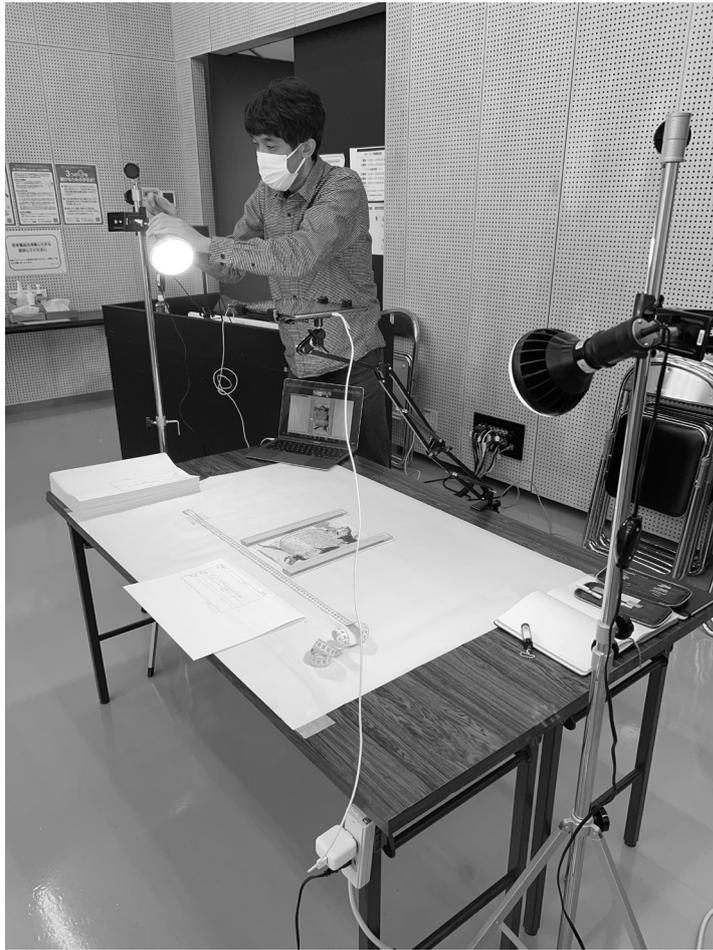


図4 ランプを試している光景

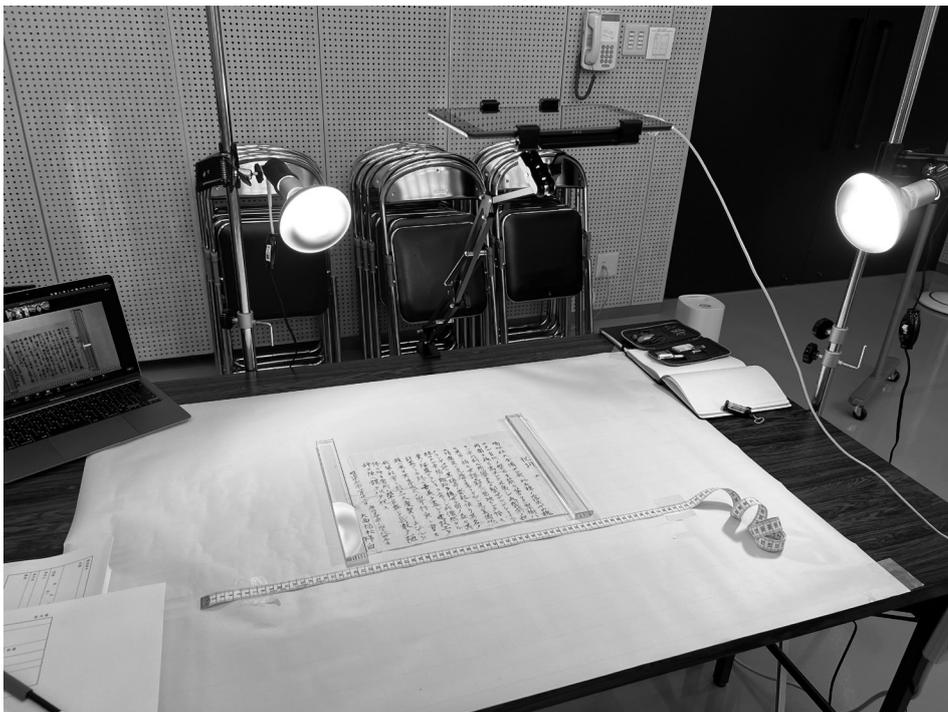


図5 ランプを交換して史料撮影を試している状況



図6 iPad Pro にメモ書きをして試している図

三、他領域（考古学）からみた今回の検証に関する知見

本研究の主眼は冒頭で野村が述べているように、「史料の扱い方を教員から学生へ伝えること」、そして「撮影の仕方や調書の採り方を学生へ指導しつつ、複数名で実施することによって作業効率をあげる」という、いわばフィールド調査における「基礎技術」の指導とその「運営手法」の開発にある。

そもそも筆者の専門とする考古学において、研究者が現地に赴くことなく遠隔手法をもとにして調査を行った事例は、現状では寡聞にして知り得ない。それは発掘という掘削作業が必ずなされる考古学においては、現場での作業が不可欠であることが最大の理由であるが、医学的手術で近年試みられているような遠隔指示ができる状況とは異なり、現場の地質や遺構の状況が極めて多様であること、また発掘技術、手法の共有も実は十分ではない点なども背景にはあるだろう。

他方、今行なった文書史料に対する遠隔調査の試みは、史料の持つ情報を的確に伝達する、という点で、一定の有効性を持つものであった。文書史料の形態や保存状態、そして文字データの正確な伝達、その扱い方といった点を伝える作業は、遠隔手法との親和性を有している。加えていえば、石造物の調査では、モノ自体の形態、銘文情報といった点が最低限押さえられれば、情報の有効性は担保されるので、そうした基礎情報の伝達手法（とくに画像解像度）など、技術的な側面の洗練化を進めていくことで、その意義が高まるものと評価できよう。

次に教育としての遠隔フィールドワークの意義を考えておきたい。筆者は大学の演習科目として考古学的内容を伝えるにあたり、本務校での以下の実践に参画した。それは二〇二〇年度前期、京都芸術大学歴史遺産学科専門必修科目である「歴史遺産 プロジェクト演習Ⅱ」において行ったもので、考古学的調査の基本作業を遠隔授業において伝える試みであった。

考古学調査では現地の地形や地質、土地利用変遷等の理解が極めて重要であり、その一環として国土地理院の「地理院地図（電子国土^①）」や立命館大学アートリサーチセンターの「近代京都オーバーレイマップ」など、適切なデジタル化データを用いて、後期から現地調査に入る予定の調査区に関する地形・地質、土地利用変遷の事前調査を各自行わせた。Google・ストリートビューを用いた現地の街歩きなども含めて行い、普段のフィールドワーク前の「事前調査」の内容としては全く遜色なく、有益なフィールドワークにつながる遠隔授業として、一定の効果があったものと考ええる。今回は個別であったが、グループによ

る調査とすれば、さらに学生間の共通理解が促されたはずであり、今後の課題としたい。

また、同僚の杉本宏（京都芸術大学歴史遺産学科教授）は、身体尺の観点から学生自身の自室の大きさや家具の配置などを身体尺によって計測し、方眼紙に図化する試みを行った。これは発掘現場における図化（遺構・遺物などの実測図作成）において欠かせない身体知の理解を促すものであり、そうした現場感覚を自宅（下宿）において学生に体感させる試みとして、極めて意義深い作業であった。また図化における縮尺の選定なども、現場での調査に直結するよい課題であったと評価できる。

以上のような講義内容は、あくまでフィールドワークの技術のうち、遠隔という「パソコン画面上」でも実施可能な内容を「無理くり」探し出して抽出した作業であったが、今後、対面再開後の演習科目の課題内容を改めて再考する機会となった。Webでの「資料探索」はあくまでも自宅学習で行えるものであり、そうした「調査成果」を持ち寄り、さらに対面で情報のブラッシュアップを図り、現地フィールドワークに臨むといった教案も考えられよう。

こうしたフィールドワークを遠隔化する試みは、他の領域でも試みられているが、例えば都市計画、まちづくりを専門とする石川初（慶應義塾大学・環境情報学部教授）らも、「リモート（フィールド）ワーク」の試みを行なっている。その実勢に際しても指摘されているが、「SV（筆者注：ゲージル・ストリートビュー）や妄想フィールドワークの面白さはあくまで対象地域が現実存在することが前提であり、実空間のフィールドワークに置き換わるものではない⁹⁾」ということであり、現実の場なくして、遠隔調査もあり得ないのである。

そうした前提に立てば、フィールドワークにおいて遠隔手法が有効であるとすれば、教育という観点からみれば、あくまでも遠隔地の自宅等にいなが得られる限りの「現地情報」を網羅的に「収集」し、「整理」する技術の習得に主眼があるのであり、そこから実際の現地フィールドワークで行うであろう「作業」のイメージトレーニングを行い、新たな視点を発見することが大切であるといえる。

このように結論付けると、結局は現場に入れないことの「代替」ではないかと感ずる向きもあるかもしれないが、実際にはこうした事前調査を厚くすることは、現場の深い理解を促すものであり、文献史料であれ、考古学資料であれ、

その評価を行ううえで必ず大きな力になるものと考ええる。ポスト・コロナ下のみならず、とくに災害時など現地にすぐ向かうことが困難な場合でも、遠隔による被災資料のデータ提示と研究者による把握がなされれば、その資料的価値を適切に評価し、暫定的保存処置を施すことで、その後の資料の状態をより安定的に保つことも可能ともなる。昨今の災害頻度の高まりのなかで、文化財保存修復の立場も含めて、こうした遠隔による資料調査の手法の洗練化が十分に期待されており、その一助として本研究をさらに深化できるよう努めていきたい。

おわりに

以上が二〇二一年度特別制作研究費助成（一般）「遠隔環境下における史料調査・整理法の研究」に基づいた遠隔で史料調査・整理を実施するための考案及び検証作業の報告である。

史料調査及び整理は、参加者が集まり史料原本を所蔵する対象に何って実施することが最善であることはいくまでもない。しかし新型コロナウイルスの感染拡大のなかで、遠隔システムを活用し、どのように史料調査及び整理を行うか、学生に史料原本の扱い方など文字化されていないテクニカルな経験知をどのように教授するかを考えることは重要な課題である。特に人文系の領域ではワークシヨップ形式の授業をなかなか実施しえない。そこでデザイン領域の知見を得ることは有意義だと思ふ。

数年内でコロナ禍は終息する可能性もあるが、遠隔授業を行う通信教育課程において、こうした手法の研究や確立は喫緊の課題であり、今後の授業手法の研究にも資するものである。遠隔システムについてはハード面、ソフト面ともに日進月歩であり、機材の高性能化が図られていくことだろう。ただ現状においてどのような手順を行うことよって遠隔化がはかれるか、最善を検討することが出来た。但し、課題もある。目録化に関わる手順の検証が出来なかつたことだ。目録化については、学生も含め複数人で実施することになる。データの共有は、Googleのスプレッドシートなどを用いるとしても、仮番号を付した後、どのような割り当てを行うべきか、実施した際の課題の洗い出しなどもすべきであろう。幸いにして伊東家文書の史料整理を依頼されており、今後も学内で整理・研究を行う予定である。その際には、本研究で検証した手法を用い、更なる研究と教育効果のある史料調査・整理を行っていきたい。

註

- (1) 大嶋えり子・小泉勇人・茂木謙之介編『遠隔でつくる人文社会学知―2020年度前期の授業実践報告―』雷音学術出版、二〇二〇年一〇月。野村は「京都芸術大学『文献資料講読』(2年生対象)授業実践報告」として授業実践報告を掲載している。なお、本文に「<https://drive.google.com/file/d/122IN7z4cujiHWx5976DQhSHWv2JL/view>」にて公開されている。
- (2) 本稿は二〇二一年度京都芸術大学の特別制作研究費助成(二般)「遠隔環境化における史料調査・整理法の研究」の成果である。共同研究を実施した野村朋弘・石神裕之・川合健太の知見が含まれている。また共同作業化での史料翻刻については、日本学術振興会 科学研究費基盤研究A「未刊古文書釈文作成のための協調作業環境の構築」(研究代表者:近藤成一、二〇一三―二〇一七年)の研究がある。野村は連携研究者として、オンライン上の協調作業環境の中で、史料翻刻を共同で行うシステム作りに携わった。この研究はあくまで史料翻刻を行うもので、オフラインでの調査や整理に関わるものではない。
- (3) 史料調査・整理については、史料原本を所蔵する機関・個人宅などに伺う場合と、史料を寄託され、大学などで行う場合など様々である。その内容によって、史料調査や整理の内実は異なる点がある。本研究では教育目的を主とし、学生を引率し他機関もしくは所属大学で調査・整理を行うテクニカルな手法を検討することとした。

- (4) アル』戎光祥出版、二〇一七年などがあり貴重である。この他、料紙の科学的調査のマニュアルとしては、渋谷綾子・横田あゆみ編『古文書を科学する…料紙分析はじめの一步―史料調査ハンドブック―』東京大学史料編纂所研究成果報告、東京大学史料編纂所、二〇二二年が公刊されている。国文学研究資料館が提供している。岩波書店が刊行した『国書総目録』を継承・発展しているデータベースである。 <https://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/>
- (5) 史料撮影をどのレベルで行うかは、調査・整理の段階によって様々である。例えば図録か公開用の画像を撮る場合、文字を範読していくための撮影などでは、持参物や時間なども異なるだろう。
- (6) 「伏見伊東家旧蔵資料に関する調査の中間報告」(京都造形芸術大学紀要「GENESIS」三三号、二〇一九年)。この調査報告書では伏見伊東家としていたが、旧所蔵者である伊東昌広氏からのご指摘により田辺町普賢寺伊東家と改めた。また御厚意によって、引き続き調査・整理する機会を得た。改めて謝意を表したい。
- (7) 寺本益英『戦前期日本茶業史研究』有斐閣、一九九九年、粟倉大輔『日本茶の近代 幕末開港から明治前期まで』蒼天社出版、二〇一七年。この他、最新のものでは、ロバート・ベイヤー『海を越えたジャパン・ティー』原書房、二〇二二年などがあるが伊東熊夫に関する言及は少ない。
- (8) 目録作成については、全点を整理しながら採る「現状記録目録」と、編年にする「編年目録」などがある。更には分野毎に整理し直す場合もある。史料の目録化と、史料の読解などについては、配信する側の教員が細く説明をした方がよいだろう。
- (9) 石川初・青柳成穂・原田馨子「リモート(フィールド)ワークへの試み」『ランドスケープ研究』85-3、日本造園学会、二〇二二年、pp.26-27、26-33

なお、本研究を実施するにあたり、史料調査・整理の方法について、本学非常勤講師角田朋彦氏より改めてご教示を得た。ここに謝意を記す。